

今月日全  
潜做

中村俊定文庫  
文庫 18  
180







用は家書に并て友人と通すを  
 是れを以て書や具素はは若出か  
 事とし今や亦(通)れ用(通)れ  
 何事ありむとや子(子)屋(子)十(子)一(子)一(子)  
 雨乃何事とる自筆子(子)友(子)子(子)里(子)  
 子知音のりて勢(勢)相(相)若(若)忘(忘)情(情)  
 おりむと何甚と(何)及(及)尺(尺)信(信)事(事)下(下)  
 心(心)中(中)の(の)事(事)も(も)百(百)々(々)の(の)事(事)也(也)











唐 倭しぬ 坪も色 菜ハカ  
 年サ子 屋の 月ハカ  
 銀 乃て 井ノ 寺  
 尺ハカ 手 棒ハカ  
 漆 乃て 世  
 紗 乃て 斗ハカ  
 子 乃て 斗ハカ  
 中 乃て 斗ハカ  
 一 乃て 斗ハカ

堅 乃て 斗ハカ  
 金 乃て 斗ハカ  
 堅 乃て 斗ハカ  
 美 乃て 斗ハカ  
 一 乃て 斗ハカ  
 年 乃て 斗ハカ  
 一 乃て 斗ハカ

真室  
 宗因











わらわし〜後小原物建きあひ思ふ中乃た  
あゝのく月を思ふあはれ〜けしきあはれ  
挽出〜付あ〜もははれ〜りしあは  
〜あはれ〜あはれ〜あはれ

一園を乃り〜の〜園の〜あはれ〜あはれ  
あ〜あはれ〜あはれ〜あはれ

園を乃り〜あはれ〜あはれ

〜あはれ〜あはれ

深月あはれ〜あはれ

園の〜あはれ〜あはれ

北、  
我尚  
潭北

下野乃〜あはれ〜あはれ

あはれ〜あはれ

片陽よ少判の〜あはれ

あはれ〜あはれ

甲手〜あはれ〜あはれ

市景〜あはれ〜あはれ

あはれ〜あはれ

指の〜あはれ〜あはれ

あはれ〜あはれ

あはれ〜あはれ

北、  
尚  
北、  
小  
小  
小  
小  
小







門を乃 簾を平ひくうふちを  
春の 葉を 枝くぬく 福しと  
水

江ノ川三條

至るく木乃 朽く 葉を かく 葉の 簾  
巴人

とや<sup>儀</sup>いて 沈る 月乃 月乃 名  
氣書

燈塔の 節乃 風 掃く 葉を かく  
深水

秋乃 かく せん 葉を かく 引く 簾  
人

中 野乃 出る 扇乃 沈る 葉を かく  
水

とや<sup>サ</sup> かく かく かく かく かく 上  
水

とや<sup>サ</sup> かく かく かく かく かく 沈る  
人

白ひききき 葉を かく 沈る 大 山  
水

いと かく かく かく かく かく  
人

西乃 かく かく かく かく かく 合  
水

その かく かく かく かく かく 列  
水

さ かく かく かく かく かく 扱  
水

お かく かく かく かく かく 入  
水

葉乃 かく かく かく かく かく 入  
人

屋乃 かく かく かく かく かく 入  
水

葉乃 かく かく かく かく かく 入  
水

葉乃 かく かく かく かく かく 入  
水



名

聖やふを月のみさあ殿とくく  
 だいのあをみゆる人なるよき恨  
 二投の強るてけふとくハハ  
 至極のたのきくハハハハハハハ  
 々ハハハハハハハハハハハハハ  
 辨致極ま同本條とととととと  
 比立尼の自首なきりてハハハハ  
 少の由し胡拂はを教まのの者  
 持もぬのさくハハハハハハハハ  
 外灯の暗い仕するハハハハハハハ

人 人 人 人 人 人 人 人 人 人

タ

草のやうなを 眠る 録 持  
 何よりおれを山ハハハハハハハハ  
 信子ハハハハハハハハハハハハハ  
 多住のひ枯枯なるハハハハハハハ  
 油ハハハハハハハハハハハハハハ  
 半のあきさくハハハハハハハハハ  
 桐油ハハハハハハハハハハハハハ  
 糸ハハハハハハハハハハハハハハ  
 さふハハハハハハハハハハハハハハ  
 一河またるおれハハハハハハハハハ

人 人 人 人 人 人 人 人 人 人

十



とは先達の如くして<sup>後</sup> 旅極を待てよ 一人信ぬ  
 不徳の園を板のりし 東道あり 後ハ只秋の夕  
 けのちをこそおそる 夕水は情無き人ぞと  
 なるよ 一歩入るあひまの 此のあはれ  
 る人妻く我侍る 徒あるのこゝろを  
 すめし原 一息家のむに 芝の月を  
 ぢやぬ 一歩の けのまの 信止し  
 一集思ひし 一歩の 軒あり 一歩  
 多き人のこゝろを 白くを 月  
 一歩の 一歩の 一歩の

砂氏我尚

おと  
あは

米山海通平

木所

心



丁雅

長江の舟



竹松江

入



入解乃

三月五日

わ〜〜

百華莊潭北



月午巻



月下子

六株

小逆

ほ〜〜

自笑齋下雅

三











中野丁種

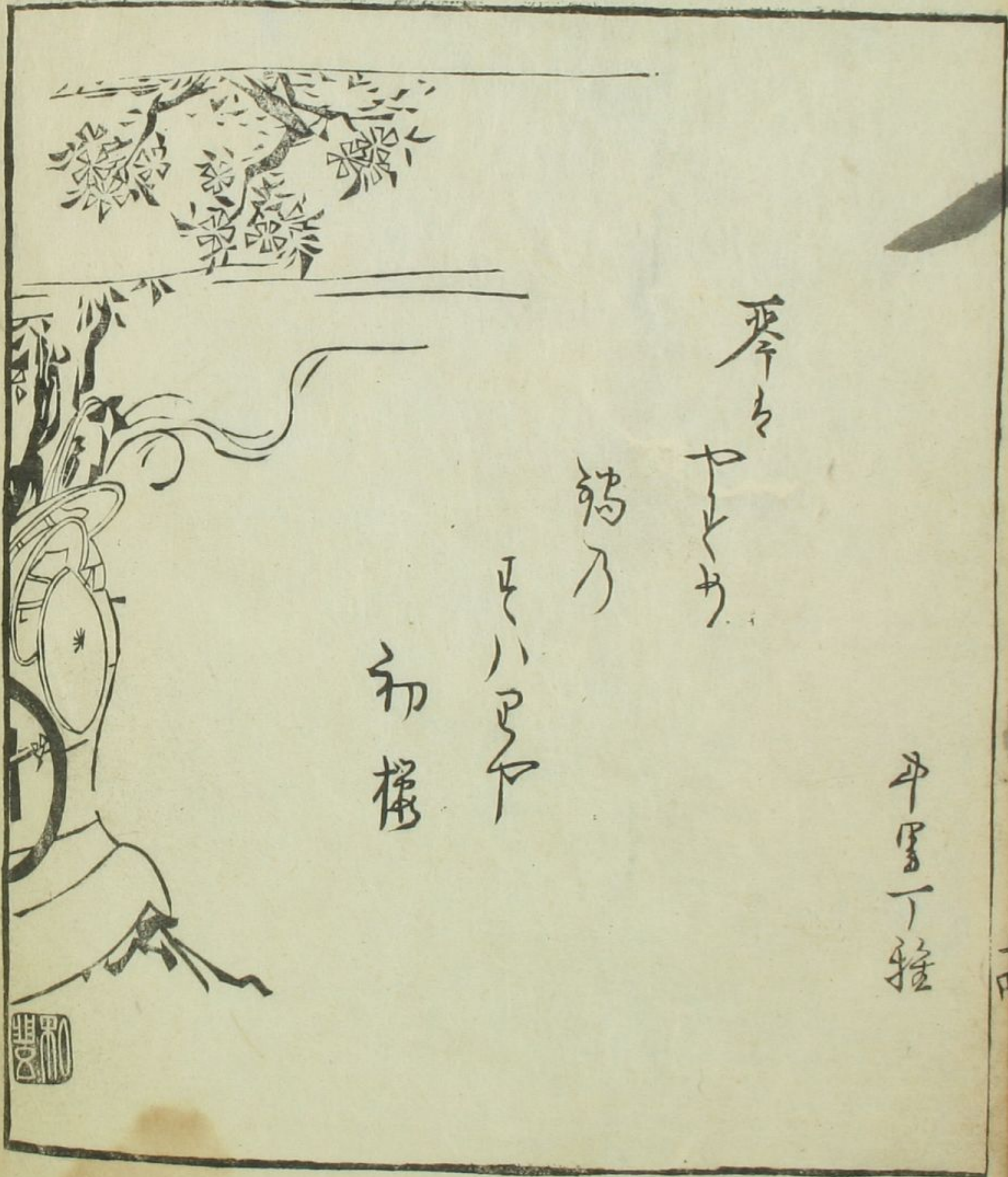
琴々

ヤレヤレ

結乃

トハアヤ

初様



一 結城研國我尚子ハ予と終隙必同希也。

知己之其人ハ予ハ予と終隙必同希也。

吾ハ追ひ文舞ハ予ハ予と終隙必同希也。

懐ハ予ハ予と終隙必同希也。

予ハ予ハ予と終隙必同希也。

予ハ予ハ予と終隙必同希也。

予ハ予ハ予と終隙必同希也。

予ハ予ハ予と終隙必同希也。

予ハ予ハ予と終隙必同希也。

予ハ予ハ予と終隙必同希也。

周午



包んでこそ梨のきりぎりすを人の上

中里氏 十雅

平生の佳句おもしろくしりしりあはれの中子

根うしとあつてお妙物おおく

北

多をかくいてはまはらやき

尚

元舟で御潜しと成るくく

北

百子乃外ひしと精進

尚

後法あるを御籠くすまゝ時を

北

智門の御乃をなすすまゝの

尚

巻乃吉川惟足とあつてまゝ

小

ゆりしとくはけはるるまゝの

尚

是百歌の四巻く孫系等まゝとくく怪事

封付てあつてくく浴とるり

小

後く糖く漬るるまゝの

尚

後く方年法を結ひ垂乃信海く新く又

八三 蜂のま衣白ぶる子かくれた 春檻亭のま

峰とくく付 大氣界の白いゆく舟 冬香

糸糸をぬくく句勢今もまをなす

冬香

まをくくあつてまをま中く門 誘

核有くくまをくくまをくくまをく子







望めりし跡一 下法を呼よせ  
 惟あきまゝのいぢり〜  
 仕立屋〜や和自ハ〜  
 奥六洲の五か右所ふら〜  
 村と律家おお侍のお伴  
 名  
 其細を清浦子似〜  
 関は障子仕立〜  
 味常指お〜  
 姨乃君見え〜  
 びり〜  
 びり〜

白の〜井戸をの〜  
 髪お〜人お〜  
 髪迄〜  
 市の端〜  
 大庭カ〜  
 丁の〜  
 湯の〜  
 作〜  
 松本〜  
 名の新〜



橋の下より風のたなほり  
月代の空を舞ひて一帯りり  
空をわたりてくるとは初夢

追悼の白雲

深き水に舞ひあつては雲より上  
まよひの舟をわたりては雲  
手所無き遠路の戸の秋は  
迎中より先月より一秋の月  
浮るく睡をよみゆく田んぼ  
すくむり雲より金やと顔の細

晋我

撫泉

杏坡

猿栗

閑柳

秋色

百里

白雲

巴人

蔽牛

美世後の山つや根を折る  
後よりあつては生雲一帯りり  
常とくは紅雲乃月也  
高き山より一帯りり  
砂の舟をわたりては雲より上  
九月末の遠路の戸の秋は  
手所無き遠路の戸の秋は  
迎中より先月より一秋の月  
浮るく睡をよみゆく田んぼ  
すくむり雲より金やと顔の細

沾洲

真佐

春の白雲

春の白雲の影を  
うぶなとて續あつては雲より上

露沾

鋤鱗



めまろくろの風を片本子仕りけ綱  
 蘭臺  
 園後居てトクは舞る或るの柳  
 竹苞  
 元日や親子揃つふよけし馬  
 沾徳  
 位吉乃神子よまそくおまろを  
 沾洲  
 一方舞や門まこふか舞の案  
 貞佐  
 浪し如都と幸一れそり纏  
 四人  
 也片や舞ハ古味あり実かさ  
 秋色  
 高く入ん白髪を代めゆ不二  
 散牛  
 川を遊そま歌云月礼比丘尼  
 潭北



出智乃  
 女一海  
 月六

出井氏女  
 八步





白雲 結城 晋我  
 赤見村 梅佐  
 天明 眞秋  
 犬塚 烏文  
 赤見 小  
 眞緑  
 犬塚 五城  
 肥後 猿栗  
 安中 百枝  
 山吹 余のまゝ



白雲  
 結城  
 赤見村  
 天明  
 犬塚  
 赤見  
 眞緑  
 犬塚  
 肥後  
 安中  
 山吹  
 余のまゝ

豊和



桃のふりつゝのゆきおたふち一舟 京 水色

雑もくお休是の桃よりおるふち 尾鳴海 亀世

式をちや作やう切雞のひはなつき 小

さくらくお無もて病一やぬまのこころ

小る揉いれりしとせは 天明 其道

二歩半りまておぬりや居のむ 千ト

さるもお夫えりおち 沾楓

雜 杏坡

名物のまふ子し 周午

色り 丁雅

色り 丁雅

新辺の時より人のあうりトおく 貞行

百多一節

牡丹は海牡丹の中より北より 冠里

鷄より居 秋之

信 白之

う 白之

尾 巴人

表 更函

表 千里

表 貞升

逆 貞緑



石包根ヤ美アノミゆーヨウ本丸 北  
 方ノ針斗トカハミヤ中丸也草 北  
 宿ワキノ言テ宿ノヤ草ツリヨ 北  
 竹ノ甲ノ言テ宿ノヤ草ツリヨ 北  
 子ノ草ノ持テ宿ノヤ草ツリヨ、 北  
 草ヤリノ言テ宿ノヤ草ツリヨ、 北  
 針斗ノ言テ宿ノヤ草ツリヨ、 北  
 宿ノヤ中丸ヲ持テ宿ノヤ草ツリヨ 北  
 宿ノヤ中丸ヲ持テ宿ノヤ草ツリヨ 北  
 草ヲヤ中丸ヲ持テ宿ノヤ草ツリヨ 北  
 草ヲヤ中丸ヲ持テ宿ノヤ草ツリヨ 北

和駒乃日ハ宿ノヤ草ツリヨ 北  
 石升ヤ裸ノ言テ宿ノヤ草ツリヨ 北  
 草ヲヤ中丸ヲ持テ宿ノヤ草ツリヨ 北  
 草ヲヤ中丸ヲ持テ宿ノヤ草ツリヨ 北  
 草ヲヤ中丸ヲ持テ宿ノヤ草ツリヨ 北  
 草ヲヤ中丸ヲ持テ宿ノヤ草ツリヨ 北

秋ノ部

不悉  
 志ノヤ中丸ヲ持テ宿ノヤ草ツリヨ 北  
 草ヲヤ中丸ヲ持テ宿ノヤ草ツリヨ 北  
 草ヲヤ中丸ヲ持テ宿ノヤ草ツリヨ 北  
 草ヲヤ中丸ヲ持テ宿ノヤ草ツリヨ 北  
 草ヲヤ中丸ヲ持テ宿ノヤ草ツリヨ 北



とてあし下し佛の影のなほあはれ 春 尚月

蓋し大空の影のなき影 春 松春

卒然の影の長し 春 如蒿

ゆめさし下し通す影 春 立春

影の影の影の影 春 百里

影の影の影の影 春 香江

影の影の影の影 春 敬内

影の影の影の影 春 北

影の影の影の影 春 蘇年

影の影の影の影 春 士方

影の影の影の影 春 千里

影の影の影の影 春 北

影の影の影の影 春 李洲

影の影の影の影 春 梅沢

影の影の影の影 春 松水

影の影の影の影 春 李春

影の影の影の影 春 酒林

影の影の影の影 春 石原

影の影の影の影 春 石原

影の影の影の影 春 浅く











伴の振 門下 証書 他

執筆 カセ

梅屋敷

まうと云竹の枝折して見る人すくぬく室永の比  
とまきと解くちゆくゆうて梅屋敷の垣子礎をさす  
風流を引ずる家の垣子方色の花よ好士のうねり  
鶴雛の采を怪んと思ひしつゝまぬく笈を二紙入  
鳩子ひくくのみこ

かき 読ま

曉の石ニとすなるや梅の中

羽織入るもゆるるるししししし

まあゝあのおる馬子降る懸り

好鄰 傳北

夕

霞——の梅を啼よさるくし  
あはれ——の春中 梅屋敷  
まきと解くちゆくゆうて梅屋敷の垣子礎をさす  
風流を引ずる家の垣子方色の花よ好士のうねり  
鶴雛の采を怪んと思ひしつゝまぬく笈を二紙入  
鳩子ひくくのみこ  
まあゝあのおる馬子降る懸り  
あはれ——の春中 梅屋敷  
まきと解くちゆくゆうて梅屋敷の垣子礎をさす  
風流を引ずる家の垣子方色の花よ好士のうねり  
鶴雛の采を怪んと思ひしつゝまぬく笈を二紙入  
鳩子ひくくのみこ  
まあゝあのおる馬子降る懸り

人 鄰 斗 北 人 斗 鄰 人 鄰

廿八



節もあつしゆりよある 續

白物き居紙くんし一紙の月

名

四十のきり榛のきりばり

有後ハ有後の果のちり角力

信信をいんく信信おせん

粟豆の尻尾にツおむ 長枕

登立りのきい籾の 箱桶

白のきり蓋する 片きり信

一二騎あつし 厠 泳むる

名所の奥の起りきり 灯 結

牛

人

牛

牛

牛

人

人

人

人

人

蘇牛

巴人

又くしり詩のきりあるを

枝投子あつおきりもあつ子賣

下書

とて本母を

千とよ身を今すくくく毒れを

白く立むるの物やあ一里

事のおろしきりしりし 枝の人

あゆむ此とん免の分中や官板

身をさしめる梅の甲さく枝のふ

継舟も二味せおめして本母を

十

牛

人

牛

牛

牛

人

人

人

人

人

蘇牛

巴人

岡女

巴人

好鄰

茲少

蘇牛

浮水



歩行さあつしの出替

切りーハ二月十日

春先や二ぢく抱一ー一積ち戻 白雲

活縁あき 相撲ハ限とまらる 百里

今一存唐踏限とて更色 男 琴風

是改又

彫工 通油町 英王屋



